

中学生のドラマトウルギー

——社会教育番組『中学生日記』のメディア史

王 令薇

<論文要約>

本論文は、D・マキャーネルが提起した「演出された真正性」(staged authenticity)の視点を手がかりとして、テレビにおいて「普通」の中学生の「日常」を中継するNHK社会教育番組《中学生日記》にその制作者や同時代の教育関係者が付与した教育的意義、およびこうした試みの役割を明らかにしようとしたものである。

これまでの社会教育番組に関する先行研究の多くはその制作意図から内容を論じてきたが、視聴者の受容や社会的影響についての言及は少なかった。また、《中学生日記》に関する先行文献において「リアル」な中学生像の提示がその特徴として指摘されているが、いったい何が「リアル」なのか、その「リアル」にはどのような価値観が反映されていたのかは、十分に議論されてこなかった。

本論文では、視聴者の関心を集めていた《中学生日記》が映す「リアル」の内実の構成に特に注目する。同番組が1970年代の日本に登場し、1980年代・1990年代を通じて人気を博し、そして2000年代になって視聴者の支持を失っていく過程について分析する。こうした歴史研究を通して、社会教育番組において真正性が、どのような価値観のもとに、どのようなイメージとして表されたのか(第1部)、また、人々の真正性への欲望を反映させた社会教育番組は、1970年代以降の日本社会においてどのような役割を果たしたのか(第2部)を解き明かしていく。

序章「中学生の日常」の演出では、《中学生日記》放送当時の社会的な受容・評価、本論文で解明したい問い、先行研究のなかでの本論文の位置づけ、方法論的枠組み、および採用する研究資料などを提示する。本論文が採用した理論的枠組みについては、D・マキャーネルの「演出された真正性」(staged authenticity)の概念を参照して《中学生日記》が描き出した「リアルな中学生の日常」を「演出された裏領域」(staged back region)として捉えることの有効性を論じている。

第1部《中学生日記》が示した「リアル」では、《中学生日記》の内容とそれをめぐる保護者、教育関係者と放送関係者等の語りを取り上げることで、同番組によって提示された「リアルな中学生の日常」の内実を考察する。また40年間にわたる同番組の変容をも追及する。時期区分に関しては、NHKが放送前の広報用に発信した紹介文を資料に、物語論(narratology)の手法でコーディングを実施し、画期の時点を明確にした。

第2部社会教育番組が果たした役割では、学校や社会の規範の必要性に目覚め、自主的にルールを守っていく生徒ないし人間の「真正」の姿に魅力を感じた《中学生日記》の制作者・視聴者と、名古屋市民や放送に出演する生徒、日本の中学生の視聴者との相互関係について考察し、この社会教育番組が見られる側の自主性を引き出すうえで果たした役割を検討する。

第1章「受験戦争」という問題提起——1962～1983年度では、前身番組の基調を確認

したうえで、《中学生日記》のスタート期の内容、制作側の意図、およびそれに対する視聴者の反響を分析する。《中学生次郎》を嚆矢とする前身番組は、「受験勉強」が過熱する風潮を問題視し、全人教育を訴える立場に立って制作されていた。特に《中学生時代》などの中学生・中学校を題材とした番組の狙いは、「子ども」から「大人」への成長過程である中学生期に対する保護者の理解を促そうとする点に置かれていた。

ただし、《中学生日記》になってからは、一人一人の生徒の内面を掘り下げ、生徒と彼らの保護者などの視聴者の自主性・能動性を引き出すことがより意識されるようになった。中学生を取り巻く環境は問題山積というイメージが1983年度までの《中学生日記》において構築されている。しかもその問題の多くは教育体制や雇用制度、性別役割分業といった社会構造と深く結びつける形で描かれている。

この時期の中学生像の特徴に関して言えば、「子ども」から「大人」へ成長していく中学生は、競争主義・管理主義のような「大人」社会の「常識」「体制」に完全にとらわれない存在として見なされ、彼らが競争主義・管理主義に挑戦する能動的な姿が「大人」の制作者・視聴者に好まれたことがわかった。

第2章 悩みへの多様な解決策——1984～2002年度では、1980年代半ば以降の《中学生日記》が提示した「中学生の日常」の変容、および制作者・視聴者がこうした中学生像に見出した教育的意味の変化について考察する。

青少年教育に対する関心は相変わらず高いが、「受験戦争」システムへの視聴者側の関心はむしろ低くなり、学校と家庭が青少年の教育全般において果たすべき責任の所在が争点となってきた。この時期の《中学生日記》のフレームも、格差社会・管理社会を問題視するものから、保護者・教師の個人責任を強調するものへと移った。

制作者が捉えようとした「中学生の日常」の内実も変わった。1980年代半ば以降、「受験戦争」システムは次第にリアリティーを持たなくなり、制作者は、保護者・教師といったそれぞれの大人を「壁」と捉えるようになり、同時に「個性」「夢」「やさしさ」「人間性」などを、「中学生」の本来・自然の姿として生徒たちに求めるようになった。

第3章 ネットに隠れた「中学生の日常」の可視化——2003～2011年度では、《中学生日記》が2003年のリニューアルを境に、大人も見られる番組から「中学生の、中学生による、中学生のため」の番組に変化したことを説明する。

内容面については、恋や友情、思春期の心身の変化に関する悩みが重視され、いじめや不登校に関する検討の中でも、家庭環境の良し悪しと中学生の問題行動との関係性は薄くなった。番組における「親」「教師」の出番が少なくなり、「大人」は「壁」としても捉えられなくなった。21世紀の中高生の生活満足度は全体的に高いと認識され、「受験戦争」や大人による厳しい「管理」のような全国の中学生在が共通して直面する「問題状況」は見えにくくなっていき、制作者は生徒それぞれの持つ悩みの解決に対応する姿勢を示した。

この制作方針は、一部の生徒が抱えたいじめ、性被害といった現実問題に対応する上確かに有効なものであったと考えられる。しかし、リニューアル後の同番組はいわゆる「少年少女文化」の一部にはならず、むしろ福祉番組の中で再編されていった。2003年度以降の《中学生日記》における中学生像は、「管理的な大人」に反抗する「中学生」ではなく、能動的に社会に助けを求められるひとり一人と理想化された。

第4章 「名古屋」という条件——中学生日記班と地域社会では、NHK名古屋放送局制作の全国中継番組という同番組の特徴が、「リアルな中学生の日常」の制作をいかに可能にしたのか、また番組に何をもちたのかを、放送局側の行動に影響を及ぼす地域社会の能動性をも視野に入れて考察する。

ドラマの要素を取り入れた総合テレビの教育番組という《中学生日記》の特殊な形式

は、NHK 名古屋放送局やそれを取りまく自主性を重んじる地域放送局の制作環境に育まれたものであった。こうした背景の下、《中学生日記》の制作者は「名古屋」を「地方」と見なし、「中央集権」の文化発信への対峙の可能性を「名古屋」に見出した。こうした制作者の捉え方と実践は、「演劇活動の自立」を目指した名古屋の演劇界・文芸界の支持を得ていた。

また、中学生・学校教育の実態に接近しようとする際に、制作者は意図的に、組織としての学校や教育の専門家ではなく、出演する中学生はもちろん、教育現場の一人一人の教師や、地域の住民の「下」からの意見を重視していたことを指摘した。こうした試みはまた、同時代の名古屋の教師や、人権団体、社会教育関係者の自主性・機会平等への関心を反映させたものでもあり、彼らに支持されていた。こうした関係性は 1990 年代まで維持されており、2000 年代においてメディア環境の急激な変化を伴って崩れていった。

第 5 章「家庭」「学校」以外の舞台——放送児童劇団と社会教育では、《中学生日記》に多くの出演生徒を送り出し、その制作現場の教育実践を支えていた NHK 名古屋児童劇団（1948 年～）の歴史を考察することで、制作者が《中学生日記》に出演する中学生への同番組の教育的意義をどのように理解していたのか、番組への出演を通じて、生徒たちはどのような影響を受けたのかについて検討する。

各放送局は 1950 年ごろから、演劇教育の理論を取り入れ、数多くの放送児童劇団を立ち上げた。1960 年代半ば以降になっても、人間形成における演劇実践の意義を訴える放送児童劇団の講師たちの視線はほとんど変わらなかった。放送児童劇団の団員を多く採用していた学校教育番組や青少年教育番組のディレクターたちも、番組に出演すること自体を生徒の自主性と協調性を向上させる「社会教育」として捉えていた。放送児童劇団が在籍する子どもの「社会的自己」(social self) の確立に与えた影響を、演劇活動自体の効果と放送児童劇団という場所の意義の両側面から確認している。

第 6 章テレビに映った「裏領域」の役割——《中学生日記》のメディア論では、活字メディア／テレビ／インターネット・SNS の比較メディア論の視点を踏まえ、特に総合テレビで放送時代の《中学生日記》が果たした社会的機能について総括する。

制作者や教育関係者の大人が《中学生日記》に期待していたのは、生徒たちにしてテレビに映る自分自身のイメージを見る側の立場に立たせることで、他者の自分に対するイメージを生徒たちに意識させ、大人社会の規範を内面化させる役割であった。ただし、生徒にとって《中学生日記》は、お茶の間といった大人と同様の情報空間に彼らを押し込めたメディアでもあった。こうした大人の視点に必ずしも同調しない生徒は、大人の前で「中学生」の演技を行いつつも、大人を排除した最深部の裏領域を意識するようになった。

SNS というニューメディアは最深部の裏領域と親和性があり、「真正性」の演技枠組みの前提となっていたテレビ的な情報環境が揺らいだことにより、言い換えれば、情報システムの分断の加速化と普遍的価値規範の崩壊により、この番組もその社会的な影響力を失った。同番組終了の最大の要因はメディア環境の変動にある。

終章ポスト《中学生日記》の時代へでは、本論文の全体を振り返り、この番組の「真正性」とは何か、この社会教育番組が日本社会に与えた影響とは何だったのか、この 2 つの問いに答えている。自主性のある「普通」の生徒個人の姿を特徴とした「リアル」を、生徒や保護者などの視聴者の自主性向上のための教育装置として制作者が捉えていたことについて明らかにした。また、1980 年代半ば以降、生徒と保護者の視聴者が同番組によって提示された価値観を相対化する手段を持っていたことをも指摘した。

(以上)